

令和三年度 第六十四回 卒業証書授与式 式辞

校門の桜の木にも、新しい花芽が見つかるようになり、着実に、時は前に進んでいることが実感できます。歳月の流れは速いもので、三年前に希望に満ち溢れて石の門をくぐった六十四期生も本校を巣立つ時を迎え、本日、ここに卒業証書授与式を挙げるにあたり、ひとことご挨拶を申し上げます。

コロナ禍での卒業式も今回が三度目となり、卒業生と保護者のみの式典はいささか寂しくもありますが、皆さんの晴れの門出に立ち会うことができなかった後輩たち、例年であればご臨席いただいている同窓会長はじめ各関係の皆さまも、離れたところから、きっと祝福してくださっていることと思います。PTA 会長 大主孔明 様には、この後、本来ならばご祝辞を賜るべきところ、やむを得ず割愛させていただくことをご容赦願います。

さて、保護者の皆さまには、お子様が本校の教育課程を修了して、新たな将来に大きく一步を踏み出されることを、心からお慶び申し上げます。三年前の入学式後には、周りの生徒と比べてできなかったことを非難するより、やろうと努力したことを褒めてあげてほしい。そうして、自尊感情を大切に育ててもらいたい、と申し上げたのをご記憶でしょうか。三年前を思い返せば、目の前のお子さまは確実に成長を遂げ、たくさんの「できること」を身に付けて、大きく、たくましく成長された姿を見せてくれています。これも、保護者の皆様が、しっかり話を聞いて、何があってもあなたを大切に思っているというメッセージを繰り返し伝え、帰ってきたらほっとできる家庭であることを心がけていただいた成果の現れです。

卒業生の皆さん。卒業おめでとうございます。入学式で、「昨日より今日、今日より明日の自分にできることを、ひとつでも多く増やすことが、成長するということ」だとお話ししました。養老孟子さんは、何のために勉強するのかという問いに、「勉強をすると、目には見えないけれど自分が成長する。勉強をする前とあとでは、あとのほうがちょっとだけ多く世界のことを理解したことになる。自分にとっての世界が広がるってことだ。」と答えていらっしゃいます。また、これまで私も何度か、入試を山登りにたとえてきましたが、同じように、養老孟子さんも勉強することを山登りにたとえておられます。少し長くなりますが引用します。

山道を登っていくのはつらい。でも高く登れば登るほど遠くの景色まで見わたせるようになるでしょ。それがキミにとっての世界。つらいけれどももうちょっと登ってみると、その分だけ世界が広がる。遠くのほうに川が見えたり海が見えたり山が見えたりする。でも全部は見えない。そうすると「その先はどうなっているのかな」と気になってしょうがない。しょうがないから、つらいけど、もう少し山を登ってみる。

そうやって見える世界を広げていくことは、まさしく自分自身が成長

するという事なんですよ。

皆さんは、この三年間で多くのことを学び、成長してきました。また、この先、さらに多くのことを学び、成長し続けていくことでしょう。その時、忘れてほしくないのは、高く登るのは遠くまで見渡せるようになるためだ、ということです。決して上から目線で見下ろす、他人を見下すためではありません。人より高く登ったことを誇るのではなく、高く登った先で見渡せる広い世界をみんなに共有してもらいたいのです。とりわけこの二年あまりの道のりは、霧に包まれ、前に進んでいる実感が湧きにくかったかもしれませんが、私たちは一歩ずつ着実に前に進んできました。もうすぐ霧は晴れます。その先にみなさんが目にする景色を、どうか私たちにも見せてください。

皆さんは、「先行き不透明な時代」が待ち受けていると言われ、たくましく生きるために、自ら考え、自ら判断し、主体的に行動できるように、と言われ続けてきました。そして、このコロナ禍での高校生活は、その不透明さが顕著に具現化した期間だったと感じているかもしれません。しかしながら、透明な先行きなどというものはあるのでしょうか。先行きというものは不透明なのが当たり前で、これから先のことを予測できると思い込んでいることが、そもそも幻想にすぎないのかもしれませんが。想定外の事態を受けても、思考停止したり、当事者意識を持たずに誰かが解決してくれるのを待っていたりすることなく、私たちは自分事として、与えられた条件の中で最適解を求め続けなければなりません。そのためには、自分一人の狭い価値観だけで判断するのではなく、異なる考えを持つ他者と協働して、集団としての最適解を求めるプロセスを地道に積み重ねていくしかありません。

卒業する皆さんは、そのために必要なかけがえのない仲間と、この伊勢高で出会いました。これからの社会の担い手として、自分の強みと弱みを自覚し、他人の強みも弱みも受け入れたうえで、お互いをリスペクトしつつ、この仲間と共に力を合わせてよりよい社会を築いていってほしいと願っています。

先行きが不透明だからこそ、どんな明るい未来でも創りだせる可能性があります。若い皆さんには、このコロナ禍で奪われたものを取り戻せる時間がこの先たっぷりあります。また、君たちはそれを実現できる力をこの伊勢高でしっかり身につけたと思います。君たちがいる限り、未来は明るい信じることができます。

本日、こうして卒業生の門出を迎えられましたことを、保護者の皆様とともに喜び申し上げますとともに、卒業生の皆さんの健康と、輝かしい前途を祈念して、式辞といたします。卒業おめでとう。

令和四年 三月 一日

三重県立伊勢高等学校長
眞崎 俊明